

日本経済新聞のインタビューでお話したこと：

私はホセイン・モハメド・エルホセイニー・アリ・エルバヨウミです。エジプトから来ました。2013年12月にエジプトのベンハ大学獣医学部を卒業し、その後、2017年12月まで同大学の獣医外科、麻酔科、放射線科でデモンストレーターとして働いていました。この間、実験的な研究を行い、修士号を取得しました。修士課程では、動物の体内由来の生体材料を用いた大型の腹壁欠損の再建に取り組んだので、興味深かったです。また、治癒プロセスを増強する可能性のある血液成分を利用し、その結果は優れた学術誌に掲載され、エジプトとオランダのトップ会議でも発表しました。そのおかげで、海外で博士号を取得するための奨学金を得ることができました。

当時、イギリス、ロシア、中国、そして日本で、この研究を行うチャンスがありましたが、日本でなら、修士課程で始めたこの興味深い研究を、より高度な方法で完成させることができると分かり、博士課程に日本を選びました。日本の大学は世界的に見てもトップクラスで、研究室には最先端の機械が揃っていて、質の高い研究を生み出すことが可能だからです。

日本に来て、ストーリーの新しい章が始まり、最初の6ヶ月のうちにWISEプログラムに参加することができました。このことは、私のキャリアにおけるターニングポイントだったと言えます。研究者としての私は、普段は研究や実験に専念し、つまりはアカデミアの世界にどっぷりと浸かっていました。WISEプログラムは、そんな私の考え方を変え、新たな地平を切り開いてくれました。学術と産業界の間のギャップを埋めるための、多くの有益な知識を得ることができたのです。そのため、産業界や社会にとって価値のある、学術の応用部分に焦点を当てるようになりました。

また、動物と人間の健康がつながっているというワンヘルスの概念もよく理解できました。日本での私の研究は、生体材料と幹細胞を用いて、死んだ梗塞心筋を蘇生させるというものです。この研究の最大の動機は、心臓の健康は人生の幸福につながるという信念からです。しかも、これは動物にも人間にも当てはまることです。私たちは、産業界で効果的に共有できる価値ある製品をさらに生産し、国民の医療レベルの向上に貢献することができます。それは、WISEプログラムの主要な目的の一つである超スマート社会（Society 5.0）の実現に貢献するものです。最終的に、私は、人類の進歩に貢献し、日本とエジプトの架け橋となれることを願っています。